

「長崎の幕末維新一五〇周年記念シンポジウム」

パネルディスカッション 口述録

コーディネーター 木村 直樹

パネリスト 宮川 禎一

松尾 千歳

横山 伊徳

田中 洋一

吉岡 誠也

織田 毅

コメント 藤田 覚

(藤田覚講師と吉岡誠也講師を除く六人の講師が登場)

木村 (敬称略、以下同) 木村でございます。早速始めさせていただきます。

本日ははじめに、私からパネリストの皆様にお集まりいただいた意図をご説明したのち、途中退席される宮川禎一先生からコメントをいただく形で進めてまいりたいと思います。

簡単に申し上げますと、長崎というところが幕末維新にどういう役割を果たしたのかという問題がこのシ



木村 直樹 先生 (長崎大学)

ンポジウムを行うに至った出発点でありました。私たちは普段長崎におりますけれども、幕末維新期の長崎は内側から見ていると、坂本龍馬が活躍していたり、あるいは大浦に新しい居留地ができていたり、様々な側面があり、実際にそうした足跡を我々は見ることができません。

ただ、長崎という都市は、幕末維新时期において、いままで構築してきたシステムに大きな変化を受けてしまうわけです。システムの変化というものは何かというと、近世期の長崎は貿易の特権都市として機能してきたわけですが、これが幕末期以降、認められなくなるということです。ですから、明治期以降の長崎は貿易の特権都市から大きく変わらなくてはいけなくなつたのです。

もちろん、変わってしまったからと言って、そのすべてが失われてしまうというわけではなく、長崎の住民は、色々な形で自分たちが持っていたノウハウを日本中に広めてゆくようになりますが、いずれにせよ、既存のシステムに対していろいろと変化がもたらされるようになります。そのような内側からの変化がある一方で、幕末維新期の外側からの大きな原動力の中でどのような役割を長崎が果たしていたのかという議論を、パネルディスカッションで進めてまいりたいと思います。

本日はお帰りの時間の関係もありますので、はじめに宮川先生に私から一点、お伺いさせていただきますのですが、本日は非常に面白い史料の中から、長崎の役割を顧みることができていると思います。先生のご研究からしてみると、龍馬と長崎という大きな流れを踏まえると、なぜ龍馬が長崎でこれほどまでに活動できたのか、龍馬にとって長崎が持つ意味というものはどの

ようなものだったのか、お話しただけだと思えますが、いかがでしょうか。

宮川

宮川でございます。龍馬中心でのお話しとなりますが、坂本龍馬研究の立場からすると、長崎という龍馬がお世話になりましたという感覚であります。勝海舟以来の長崎海軍伝習所の伝統、それから、龍馬が長崎へ行くたびに亀山社中、海援隊という形で経済活動を行いましたので、長崎は龍馬にとって所縁の地であったと言ってもよいと思います。

ご存知のように龍馬は船が大好きだったのですけれども、船には苦勞させられまして、時には沈み、奪われるということもありました。例えばユニオン号については、薩摩藩の名義で長州藩が買った船を亀山社中が運営して、亀山社中が儲けを出すという作戦だったのに、上手くいかずに、長州藩に取り上げられてしまい、ワイルウエフ号のように買った船は嵐で沈んで、さらに、いろは丸は借りた船ですけれども、こちらも事故で沈没してしまいます。

このように、船には散々苦勞させられた坂本龍馬ですが、一八世紀までとは違って、一九世紀は蒸気船の時代がやってきて、ペリーがやってきた時に日本人が恐れおのいたという話もありますが、これは全くの誤解



宮川 禎一 先生
(京都国立博物館)

と思われれます。当時の日本人も、このような便利なものが存在するのであれば、自分たちの藩でも買わねばという風に考えたと思うのです。帆船だと風待ち、潮待ちが必要になるのですが、蒸気船のように自らの動力で動く船があるのであれば、そちらの方が便利ですよ。ですから、龍馬の目の付け所というものは新しいというか、蒸気船の時代に船にこだわって、拠点として長崎を選びます。長崎は幕府の天領でもあるので、危ないから龍馬は奥さんを下関にしているわけですが、龍馬は常に全国各地を行ったり来たりしている。その拠点の一つが長崎ということになります。

また、蒸気船を保有していると情報や軍事力を先取りするということにもなりまして、その昔は薩摩から関ヶ原までどれほど時間を要していたかと思われるのですけれども、この頃になると、蒸気船を薩摩藩が購入して、長州兵を乗せて瀬戸内海を進軍するような時代に入っていますから、蒸気船こそが幕末の歴史を進めていったようなものと評価できます。長崎は海の町ならではの役割を持っていたのではないかと思います。

それから「薩長土肥」という用語がありますけれども、個人的には薩摩、長州、土佐藩はわかるにしても、肥前(佐賀藩)の役割がはつきり見えないところがあります。大隈重信などは明治新政府に入ってから活躍するわけですが、慶応三年以前だと一体どのような活動をしているのか判然としない印象を受けます。むしろ「薩長土肥」という言葉がいつできたのか、こちらの歴史的理由の方が重要なのではないでしょうか。本当は慶応三年頃であれば、薩長土、尾(尾張藩)、越(越前藩)、芸(安芸藩)、宇(宇和島藩)あたりが、政局の中心にあったわけ

です。しかしながら、いつの間にか「薩長土肥」という評価になってしまったという点は、維新史研究の上で重要な意味を持っていると思います。

私は越前藩前藩主の松平春嶽が幕末維新に果たした役割を重視して、春嶽公を褒めるので福井に呼ばれて話をするわけですけれども、福井の人は不思議なことに、越前藩が幕末維新に果たした役割をあまり認識していません。越前藩出身者は維新政府に最初いたわけですけれども、気が付いたら、左遷されて閑職に飛ばされてやめてゆく、というような感じになってしまったのです。

その越前藩から幕末の長崎に三岡八郎がやってきました。越前藩の取引所も大浦の小曾根家の近くに置かれていました。そこで、財政立直しのための輸出産業の促進が図られました。ご存知のように三岡は維新後、由利公正と改名して、明治新政府初期における太政官札の発行などに尽力するわけですけれども、彼の伝記を見ると、なぜ明治新政府が正貨を金貨や銀貨でなく、紙幣を用いるよう決めるに至ったかについて理由が書いてあります。

三岡が幼い頃に行われていた、水野忠邦による天保の改革では、金や銀の枯渇が背景にあつて、幕府が極端な緊縮財政を展開し、経済が停滞してしまつたという状況にありました。そうした状況を目の当たりにしていた三岡は、貨幣の材料となる金銀がないから経済が回らないのであれば、金銀を材料としないでも発行ができる紙でお金をつくれればいいじゃないかという考えになつてゆき、慶応四年（明治元年（一八六八））の四、〇〇〇万両以上にわたる太政官札発行に踏み切るわけです。

お金は使つてなんぼであつて、貯蓄することや、収入にあわせて支出することは、我々が小さいときに習つたような、堅実なやりくりの仕方なのですけれども、国家としては借金をしてでもどんだんお金を使うことが正しいという、現代の日本銀行の金融政策にも通じるような考え方を三岡は持つていたのです。

三岡は長崎で得た経験も踏まえながら、長崎への出向後、福井で閉門に処せられていた頃に、坂本龍馬が訪ねてきた際、そうした自らの思想を龍馬に語つたと思われる節があります。それを聞いた龍馬は三岡の考えに感銘を受けた旨の発言が、三岡の伝記にも収録されています。

そこから次第に紙幣の発行によつて経済を活性化させるといふ、近世的でない近代的な経済政策が広まつてゆくということになります。そのような意味からすれば、明治初期の経済政策の源流は長崎から出来上がったということになり、長崎が果たした役割は深いと考えます。簡単ですが、以上です。

木村

お時間も迫つていゝなか、どうもありがとうございました。それでは、他の先生方にも順番にお話しただこうと思います。実は本日お時間の関係で、どうしても研究発表をご依頼することができませんでしたが、尚古集成館の松尾千歳先生もお見えですので、まず最初に松尾先生から本日のレジュメの末尾にあります資料を使いながら、幕末の薩摩藩と長崎の関係をお話しさせていただきます。

その後、午前中にお見えでなかつた参加者もいらつしやるかと思つたので、東京大学史料編纂所の横山伊徳先生にも、幕末維新期のオランダにとつて長崎が持つた意味についてお話し

いただきたいと思ひます。

お二人の先生方にはここで話したいことを、さらに深める形で長崎が幕末維新期に果たした意義を、他の皆様の研究からしてみるとどのように見えるのか、お話を伺いたいと思ひます。

松尾

ただいまご紹介いただきました、尚古集成館の松尾と申します。私ども尚古集成館は、幕末の薩摩藩の工場群、集成館にちなんでおります。集成館という工場群は薩英戦争、西南戦争で火災に遭いますが、焼け残った建物が現在の尚古集成館本館になります。江戸時代の建物です。こちらが明治日本の産業革命遺産の構成資産となっておりますけれども、これは日本で一番古い洋風石造工場建築物になります。

そして実はこの建物なのですけれども、長崎にあった長崎製鉄所、現在の三菱重工長崎造船所の土台となった建物ですが、ハルデスたちが建てた工場を、見よう見まねで作っているということになります。

イタリア人の方々が尚古集成館を訪れた際の話ですけれども、日本にある一番古い洋風石造工場建築物です、という風に我々が説明をしたところ、きょとんとされた後、一体どこが洋風建築なのでしょうかと問われました。

例えば、本館外観の一番下部にある亀腹石というものは神社建築でよく使われるものです。屋根はトラスをイメージしているのですけれども、トラスが三角形を基本に組み立てるものだということを理解していないせいで、屋根が三角形でなく台形になっている部分がありまして、イタリアの方からすると、尚

古集成館は中途半端な洋風建築という評価になってしまひます。

逆に言ひますと、尚古集成館は本場の外国人の手助けを借りずに薩摩藩が近代化に取り組んでいくことの表れともいふことができます。そういった経緯を踏まえつつ、長崎でハルデスたちが建てた長崎製鉄所はすでに失われておりますので、それを補完する役割もあつて、尚古集成館は世界遺産の構成資産に入っているという形になります。



松尾 千歳 先生
(尚古集成館)

それから、私は島津興業という島津家の現当主が会長、次期当主が社長を務める会社の職員という立場でもあります。そうした関係で、島津家に関する史料館を運営するという目的で、尚古集成館で仕事をしているということになります。

今日の研究報告でもお話しましたが、薩摩藩は何を考へているか分からない、不気味だという話が出ておりましたけれども、薩摩藩は他の藩と比較しても、たしかに非常に変わった藩でありました。

まずその領域は、現在の行政区画で言ひますと、鹿児島県と沖縄県の全域に宮崎県の約三分の一にもなります。このようないくつもの県にまたがる広大な藩は他にないとも言ひます。鹿児島を起点に琉球の最南端までを半径として、円を描いてみますと、円の中には江戸が入ってしまうほどです。

そして、現在の沖縄県部分は、中国皇帝が任命する琉球国王が統治する琉球王国がありました。藩の中に外国があつて、ここでは中国貿易も行われているという「鎖国」体制から一歩離れたような状態になっていました。

薩摩藩の石高ですけれども、七二万石といわれています。加賀の前田家に次いで、天下第二の大藩とも言われていますけれども、他の藩は白米を基準として収穫量を測るけれども、薩摩藩は粳を付けたもので、実際の獲高は半分ということになります。

そして侍の人数なのですけれども、他の藩は領内の全人口に比して侍が占める比率が5%程度であるのに対し、薩摩藩はおよそ二六%にも達します。

ですから、普通の藩ですと、殿様が城や館のあるところに武家屋敷を形成させて、侍たちはそこに集住しているわけですが、薩摩藩の場合、領内の全人口の四人に一人にも及ぶ人々を鹿児島城下に集住させることはできませんので、中世の体制を維持することになります。地方に外城という行政区画を設けて、それぞれの中心地に武家集落を形成するということになりました。知覧とか出水など、鹿児島県内に武家屋敷が数多く残っているのは、そうした名残になります。とにかく侍の数が多くということが言えます。

薩摩藩を現代の企業に置き換えて表現しますと、粉飾決算で売上を倍にして、従業員は基準の五倍抱えているというような会社になります。

それで薩摩藩の財政が成り立っている理由は、副収入が多いという点が大きいです。薩摩藩には砂糖など、他の藩が栽培で

きないような作物が豊富に存在します。それから、琉球を経由して中国との貿易を行っていますから「鎖国」してもらっていない方が、薩摩藩としては儲かるのです。海外貿易の窓口としては、長崎と薩摩で中国との貿易関係を独占できますからね。

加えて、薩摩藩はそれを良いことに、大規模な抜荷を行っています。幕府は制限付で薩摩藩による琉球口での貿易を認めているのですが、薩摩藩はその制限を無視します。薩摩藩による大胆な抜荷が可能となった背景としては、藩主の島津家は徳川將軍家に正室を送り込んでいた唯一の大名であり、徳川將軍家の縁戚として、密接な関係を有していたことが要因として挙げられます。幕府中枢でも抜荷の事実を把握はしていたのですけれども、そうした事情もあり、なかなか手が出せませんでした。薩摩藩による大規模な抜荷は、長崎貿易に支障をきたすほどの規模であり、長崎の方にはご迷惑をおかけしたということにもなります。

例えば、長崎に来た中国人たちも、中国から長崎に貿易品を持ってきてても、すでに琉球経由で日本国内に製品が出回ってしまっており、さらに長崎から中国に貿易品を持ち帰ってきても、中国国内には琉球経由で日本製品がこれまた出回ってしまっているのです。何とかしてほしいと、繰り返し幕府に訴えていたりもします。

ともかく、そういったやり方もあって、幕末の薩摩藩は屈強な西南雄藩として生まれ変わったということが言えるかと思えます。薩摩藩はこのような状況でありました。

(松尾千歳講師の発言終了。宮川禎一講師、退席)

木村 ありがとうございます。ここで座席が一席空きました。先ほど宮川先生からの置き土産で、なぜ佐賀藩が薩長土肥の二つに位置付けられているのだろうかという問題提起もありましたので、ちょうど関連する研究報告をしていたいただきました、佐賀大学の吉岡誠也先生にパネリスト席におかけいただき、お話を頂戴したいと思います。すでにパネリスト用の名札もご準備しております。どうかよろしくお願いいたします。

(吉岡誠也講師、登壇。横山伊徳講師の発言開始)

横山 オランダ貿易会社についてということで、午前中に行った公開学習会のお話をいただいております。皆様のご報告を聞いて感じたことを織り交ぜながら、長崎が幕末維新期に果たした意義について、お話ししたいと思います。

先ほど、宮川先生によって明治新政府にとってお金は貯め込むものではなく、使うものだといったお話がありましたけれども、その一方で内政環境が整っていない状態で、紙幣だけを大量に刷ると、財政が大変なことになってしまうわけです。

すでに触れられたことですが、幕末の越前藩において三岡八郎主導のもと、大量の藩札を発行して、財政の立直しができた理由には、それに値する輸出品を用意できていたから、それを担保にお金を刷り出すことができたのではないかと思っております。

私はそのような輸出品流通を「専売」とご紹介申し上げるのですけれども、今日の田中先生のお話ですと、専売制、これ自体は元からあったものでしたが、その枠組みをより強化しよ

うということ、下関を中心に長崎との間において、専売品による交易関係を強力に構築しようとしたのが長州藩であるというご指摘であったかと思えます。

一方、薩摩藩では強力な専売制が敷かれており

まして、長崎で主に取り扱った専売貿易品に限って言えば樟脳、土佐藩も樟脳を大量に輸出しております。佐賀藩では蠟、越前藩では生糸を輸出品として長崎に廻送してくるということになります。

薩摩藩による長崎での樟脳輸出はその一番の典型でもあるのですが、長崎貿易の中に各藩で生産された特殊な商品売り込むには、そのための諸藩による藩制上の仕掛けが、どれほど機能していたかということが重要であるようです。これは、諸藩による幕末期の長崎貿易における専売制の段階的展開を考える上で、共通する傾向ではないかと考えます。そのように各報告を拝聴して感じた次第です。

江戸時代から長崎には諸藩の蔵屋敷が置かれて、品物の集荷体制というものが、貿易の特権都市固有のシステムとして備わっていますし、長崎は開港後の貿易地としても三つの港の一つに含まれていますので、諸藩が専売貿易品の売り込みにあたって、長崎には条件が整っていたというのが感想です。

続いて、船舶の交通及び販売拠点としての特徴が長崎にはあ



横山 伊徳 先生
(東京大学史料編纂所)

ります。現在、私はこれまで翻訳しかけのオランダ語史料をまとめている状況ですが、その中で、長崎にオランダの総領事であったデ・ウィットという人物が、本国に日本の国内情勢などを書き記して送っている史料がありまして、長崎と上海間、横浜と上海間には船便がたくさん通っていることがわかります。ところが長崎と横浜間には船便がほとんど通っていないので、長崎と横浜間の連絡には陸便を使った方が早いということがありました。

逆に上海なり中国からみると、長崎に対して感じるメリットは船での連絡が近いという点にあったのです。船での航海は非常に大変なことのようには思われませんが、こうした状況は一八世紀末頃に大きく転換します。先ほどの基調講演で、藤田覚先生が日本の歴史が大きく変わるのは一八世紀末頃であるとお話しがありましたけれども、アジアや西洋諸国との船舶交通を見渡しても同じことが言えるかと思えます。

当時の西洋各国の船は本国から中国まで、貿易のため航海してきます。中国市場で売れる貿易品を持ってきて売り払うと、当然ながら対価としてお金が手に入ります。ただし、そこで得たお金や品物を本国まで持って帰る際、必ずしも自分の船に積載して持ち帰る必要はありません。本国まで持って帰ってくれる代行者や送金業者がいれば、彼らに船賃や手数料を支払えばよいのです。そしてその船自体を売り払った方がかえって儲かるということにもなります。

澳門（マカオ）という都市は、乗ってきた船が売り払われ、中古の船として転売される場所であったようです。実は長崎にやってきて売られる船は、そうした可能性をもってやってきた

ものが含まれていたと考えられます。そのような意味で、長崎が中国に近いことのメリットが存在したと思っております。

このように、日本国内で西洋船籍の中古船を転売する拠点として、長崎が機能していた可能性があることに加え、幕末期の諸藩によって専売品の売り払いによるお金の蓄積が図られたという二つの出来事は、幕末の長崎の動きの原動力につながったとも評価できます。私の方からは以上でございます。

木村

ありがとうございます。続いては田中先生にお伺いします。

今日の研究報告では、経済面から見た長崎の意味についてお話がありましたけれども、ただいま横山先生から専売制のお話もありましたが、長州から長崎にある程度様々な物資が集まってくるのは、幕末に入ってからなのでしょうか。それともそれ以前の長崎俵物などの時代から、何かしらの形で長崎にそのような動きがあったのでしょうか。

どういう位置づけで当時の長崎が経済的に意味を持っていたのかが気になります。幕末の長崎に様々な物資が集まってくるという現象を、幕末以前に構築されていた関係に基づいて捉えるべきか、または幕末期の新しい動きとして見てゆくべきなのか、教えていただきたいと思えます。

田中

長州藩側から見ると、俵物などは江戸時代中期以降、長崎における対中国貿易の輸出品ということで、長州藩から長崎に廻送しているものがあります。幕末期になると、その枠組みの中に、様々な品目が輸出・輸入ともに加わってくるというイメージを持っています。

外国への販売品の例として、石炭があり、また、蒸気船、武器の購入などを幕末の長州藩は行うようになります。しかしながら、長州藩は外国から直接にこれらの品物を購入することができませんので、なかなか調達が上手くない部分があります。

そこで、輸入品の調達地として長崎の役割というものが当然必要視されるようになります。加えて、薩摩藩という、長州藩にとっては外国からの輸入品の調達を助けてくれる存在が現れるのです。

幕末維新期でないと、長州藩が薩摩藩の手を借りて、共に長崎での貿易に参入するといった動きが起こることは考えられない部分もありますので、江戸時代中期までに構築されていた長崎での俵物の輸出を中心とした貿易体制の基礎部分に、この時代特有の諸要素がさらに加わってくる、もしかすると、それこそが「変わる」と表現できるのかもしれないですけども、幕末維新を考える上での一つの画期としてとらえられるのかなと思います。

木村 ありがとうございます。俵物というのは長い間、長崎からの輸出品ということで大きな意味を持っているわけです。今でも長崎の品物を俵物と称することもあるのですけれども、この



田中 洋一 先生
(下関市立歴史博物館)

うち、長州藩からもたらされる俵物、昆布などがその代表ですが、薩摩藩にとって昆布は、琉球経由で輸出することが大変得意な品物でもあるわけです。そういった競争の中で、果たして薩摩藩と長州藩は仲良く長崎貿易に参入することができていたのか不思議に思うことがあるのですが、いかがでしょうか。これは幕末維新期に至って、様々な品物売り出すことのできていたから、お互いどんどん売り出してしまうということになるのでしょうか、それとも輸出品の競争について、何かしら問題視しているところなどはあるのでしょうか。松尾先生と田中先生からお聞かせいただければありがたいのですが。

松尾

薩摩藩も昆布などの俵物を大量に仕入れていました。主な調達元は北海道からなのでですけども、アイヌ人の墓から丸に十字(注：薩摩藩主である島津家の家紋)の盃が出土していたりします。薩摩藩は彼らを抱き込んで、俵物を大量に調達して、長崎ではなく、琉球経由で中国に輸出しているのです。

とにかく、薩摩藩は海外交易で財政を何とか維持しているところがありました。それに長州藩の輸出品が加わってくるということなので、長州藩は薩摩藩が持っているような、俵物調達のための強固なパイプは持っていないと思いますので、いわゆる商売敵にはならないのではないかと考えます。

反対に薩摩藩の領内は火山灰の土壌でありますから、米であるとか、他の地域で豊富に収穫できるような農作物等があまり取れません。先ほどお話ししたように、薩摩藩は実高が三五万石程度しかないことから、慢性的に米が不足している状態でありまして、それを長州藩に何とかしてくれということで融通を

依頼するという流れでありました。おそらく薩摩藩と長州藩で交易品が重複することはなかったと思います。

田中 そうですね、長州藩はライバル視すらされていないところも

ありますが、交易品は被っていないかと思いますが。下関にも松前藩の会所が設置されて、取締なども下関で商人が実施することになるので、俵物自体は下関に来ているのですけれども、そこから長崎に持ってゆくのかというと、長崎ではなく大坂に廻送する物が多く、取締も大坂行きのを主眼に置いていた傾向がありました。

加えて、万延・文久年間頃は薩長交易もしようという前提がありましたので、そのあたりを踏まえると、薩摩藩と長州藩はその当時、経済的には良好な関係であったかと思います。

木村 ありがとうございます。二つの藩の関係性の構築に、長崎

も舞台として関わったという流れでお話しが進んでまいりましたが、ここで吉岡先生にも研究発表の内容に即しながら、お話しをお聞きしたいと思います。

佐賀藩は長崎の人間からすると、長崎警備にも従事していますし、一八世紀末頃から長崎警備に様々な分野の技術を導入してゆくという点では、長崎への関与の度合いから考えると熱心な突出した活動をしていると思います。

そうした技術集団として、佐賀藩が幕末の長崎に与えた影響は少なくないと思いますが、その一方で、以前松尾先生が出版物に書いておられたような、幕末期における薩摩藩と佐賀藩との藩主レベルの婚姻関係に基づいた交流なども存在していたと

思います。しかしながら、意外とこういったものについては機能せず、お互い独自に幕末の政局を乗り越えていこうとしているという理解でよろしいのでしょうか。

このあたりは、佐賀藩がどのようにして幕末の政局に浮上していったかを考える上でのキーワードとして重要だと思っています。佐賀藩が単なる軍事上の技術集団としてのみ機能していたわけではないとも考えられるのですが、いかがでしょうか。

吉岡

薩摩藩との関係につきましては、島津斉彬が存命の安政期までは親交がありました。斉彬が亡くなった後、佐賀藩主の鍋島直正も隠居すると関係は薄れていきます。それは薩摩藩との関係だけでなく、他の諸藩とも、佐賀藩は関係を極力持たないようになってゆく傾向があります。そういう意味で佐賀藩は、幕末期において、かなり独自の路線を歩んできた藩であると思います。

先ほど「薩長土肥」という表現にからんで、維新期の政局に対する佐賀藩の役割が捉えづらいという指摘がありましたけれども、佐賀藩にしてみれば、長崎での活動に限定される部分はあるものの、長崎警備をずっとやってきたという自負がある中で、土佐藩や薩摩藩などの倒幕派の諸藩が、突然、長崎にやってきて、いろいろと政局を



吉岡 誠也 先生
(佐賀大学地域学歴史文化研究センター)

取り仕切り始めたという感覚を持っています。

これは史料上でも述べられていますが、佐賀藩は、長崎奉行がいなくなったあとの政治状況について、倒幕派の諸藩が勝手にいろいろとやってけしからん、自分たちも主導権を握らなければならぬと考えるようになります。

結果、佐賀藩からも大隈重信や副島種臣といった、それまでの佐賀藩で表立って政治行動を取れなかったような人材が、自分たちの能力を新政府に認めさせることにより、次第に維新の政局の中で浮上していったということが言えると思います。

そのような意味で、長崎という場所は、佐賀藩が維新期の政局に浮上してくる上で、一つの重要な役割を果たした舞台であると考えます。

木村 ありがとうございます。あともう一つ、佐賀藩にも専売制といえますか、本日午前中の公開学習会でも、幕末にオランダ貿易会社が佐賀藩から蠟を手に入れるという事例紹介がありました。もともと佐賀藩は焼物を、ある種の専売品として長崎からどんどん輸出してゆくという側面もあったかと思いますが、そういったものは、やはり長崎を前提として専売制が構築されてゆく、換言すれば、長崎に依存していた部分もあるのでしょうか。長崎で専売品を売るということも佐賀藩の財政を支えてゆく上で重要であったと捉えてよいのでしょうか。

吉岡 研究発表の内容には含まなかった部分であったのですけれども、当然そのようなところはあると思います。佐賀藩が軍事的に突出した能力を持ったと言われますけれども、その中で

も、特に佐賀本藩の重臣である武雄鍋島家などは、慶応二年（一八六六）から四年にかけて、長崎で最新鋭の武器を大量に購入しております。

なぜ、武雄鍋島家がこれほどの武器を購入できたのかという問題については、実態が詳らかでなく、財政上の裏付けも見えてこないということがありますが、専売品を長崎で売り払って得た資金で、大量の武器を購入していた可能性もあると考えます。

木村 ありがとうございます。次に織田毅先生にお伺いします。これまでの議論では長崎について、貿易港という場所としての意味を持っていたというお話ですが、多く見受けられました。

確かに、幕末期の長崎には諸藩から様々な人材がいろいろな形で入ってくるわけです。長崎は天領でもありませんので、他の藩領に比べると交通の自由はありますが、その一方で、諸藩の役人が長崎に入ってきたからといって、即座に長崎で何か行動を起こすことが可能であったかといえますと、決してそのような事は簡単ではなかったとも考えます。

そういった時、長崎にやってきた諸藩の役人にとって、長崎にいる町人や地役人層との関係性の構築は非常に重要になると思います。例えば、オランダ通詞などは佐賀藩や薩摩藩などと関係性をもって立ち回っているという事例がありますが、彼ら長崎の地役人たちが諸藩との間で果たした役割についてお話しをいただければと思います。

織田 確かに江戸時代は人口の移動に厳しい部分がありまして、長

崎においても他所から人が入ってくると、どういう用事で、いつまで滞在するという内容を記し、旅人掛というところに届けを提出して、旅人掛は届けを受付して監督するということが行われていました。

しかしながら、幕末期になるとコントロールが利かなくなつて、坂本龍馬をはじめとする亀山社中の人々のような、長崎の人たちにとっては得体のしれない人たちが入ってくるという状況になります。その一方で、それら他所から長崎に流入して来る勢力は、何らかの人脈上の渡りをつけて長崎に入ってくるのですね。

その中心となる拠点が、木村先生も以前、指摘されていた諸藩の蔵屋敷になります。蔵屋敷に出入りしている館入（たちいり、やかたいり）という人たちがいて、上は町年寄から下は長崎会所の筆記役のような人たちまで、丸抱えで出入りさせているということになります。そういった諸藩のネットワークが蔵屋敷であるとか地役人の館入の活動によって存在していて、例えば、坂本龍馬をはじめとする亀山社中の人々も、長崎では薩摩藩の庇護のもと、薩摩藩士と称して活動していました。もし何かあれば、治外法権である蔵屋敷に身を潜めればよいわけですね。そのような活動にあたって、蔵屋敷とそれに関係する地役人や町人たちがサポートしてゆ



織田 毅 先生
(シーボルト記念館)

くということになります。坂本龍馬の長崎での活動はやはりそういったサポートなしでは考えられないと思います。

二百数十年という歴史の中で、いろいろな方法が編み出されて、長崎の社会というものは、大まかに長崎奉行所と町人に分かれるわけですが、この中には本音と建前が存在しているのですね。要するに建前では長崎奉行所は町方を厳しく取り締まりなさいと言いつつも、内実は両者が妥協しながら長崎の町政を運営しているところがあります。

町政を運営している人々たちも親戚同士であったり、兄弟であったり、そうした狭いグループによって担われていますので、何かあればそういったお互いのサポートが期待できる世界でもあります。彼らに對し、ある程度の取り掛かりさえつけば、活動ができただろうと思います。

木村

長い間、様々な藩が長崎でネットワークを張っているということが潜在的にあつて、その上に坂本龍馬などは上手に乗って活動してゆくような理解になると思います。

本日お話しを伺いまして、薩摩藩にせよ、佐賀藩にせよ、長州藩にせよ、そういったネットワークをどういった形で利用しようとしていたのかという点については、個人的にも気になることでありました。

とりわけ、薩摩藩や佐賀藩については多少、分かっていることもあるのですけれども、長州藩は蔵屋敷を抱えながらも、元々どういう風に長崎の都市社会に入ってきて、それが維新の頃に何か機能したのかという点について、詳しくお聞きしたい部分

があります。各藩同士の関わり合いという視点も含めて、関係する三人の先生からご教示いただければと思います。

田中 私自身、下関市から参ったこともありまして、長州藩の長崎

における蔵屋敷の機能に関しては、お答えすることが難しい部分もあるのですけれども、長州と一概に言いますが、本藩に加え長府藩などの支藩も存在しています。

このうち、下関に藩庁を置いていた長府藩士がどのようにして長崎に入ってきたかという点、禁門の変以前においては、彼らも本藩の長州藩に準じる形で長府藩士と称して、長崎に出入りすることが可能であったものの、それ以後になると、政局の変化が原因となって、長州藩士もしくは長府藩士と自称することができなくなりました。

そのため、長州藩士や長府藩士は薩摩藩や平戸藩など、他藩の名義を用いて長崎に出入りするようになります。また、名義を使用したかは不明ですが、対馬藩を仲介役にして長崎に入ってくるようにもなります。その上で薩摩藩士から案内を受けて入ってくることや、自分たちが出入りすることが難しい部分もあるのです、平戸藩士を使って情報を仕入れるといった方策を取っています。

どうしても禁門の変以降、長州藩や長府藩は自由に動き回れる場所が少なく、情報収集や現地での活動が難しいところがあります。自分たちを助けてくれる他藩から協力を得て、長崎に入ってくるというパターンが多いように感じています。

伊藤博文などは吉村莊蔵と変名を称して、長崎にやってきたりしていますので、これらの動向が直接蔵屋敷とどのように関

係するかは、何ともいえない部分もありますが、他藩の協力によって長崎との関係性を維持してゆくと動きになると考えます。

松尾

薩摩なのですけれども、実は肥前ととても関係が深い土地であります。本日、鹿児島から陸路で参りましたけれども、熊本―福岡―佐賀を経由して長崎に到着しました。たいへん遠く感じました。ところが海路で参りますと、薩摩と肥前はたいへん近い。

そして、双方とも類似する役割を担っていました。薩摩も外国との窓口でありました。鉄砲やキリスト教の伝来地は南九州でした。それが「鎖国」によって長崎が窓口になったので、鹿児島には外国船が寄港できなくなっていました。それ以前には鹿児島にも外国船が多数来航して、数多くの中国人たちも居住していたのですけれども「鎖国」体制が築かれる際に、そうした人々も長崎に移住するか、鹿児島に残って帰化するかを迫られたのです。

鹿児島で唐通事を研究されている方の話によると、穎川・穎川という唐通事の家系が鹿児島と長崎にありまして、どちらも中国から帰化されているのですが、家の由緒に関してそれぞれ類似する話が伝わっています。

鹿児島の方は、元は医者で鹿児島にやってきて島津家に仕えた後、楠木正成の娘を妻に迎えたとの言い伝えが残っています。一方長崎の方は、同じく元は医者ではじめは島津家に仕えたものの、兄弟が分家する形で長崎に移り住んできて、楠木正成ゆかりの女性を妻に迎えたと伝えられているとの話を聞いたこと

があります。

年代が符合しないこともありますので、長崎の方がより事実に近い言い伝えではないかとも考えられるわけですが、同じような話を鹿児島と長崎で伝えているということ自体が、以前から双方の土地の関係が深いということの、一つの表れとみることができます。

それまで海上貿易で潤っていた鹿児島ですが、江戸時代以降、活発な貿易活動を行うことが叶わなくなりましたので、琉球及び長崎経由での貿易に依存するようになってゆきます。ですから長崎に蔵屋敷を構えて、樟脳などは長崎を経由して輸出を図るようになります。ヨーロッパで使われていた樟脳の大部分が日本産であり、その多くが薩摩と土佐で生産されたものでありました。

そのため、薩摩藩にとってみれば、長崎も外貨を稼ぐための重要な窓口でありましたから、情報網を長い間にわたって張り巡らせていたということがいえませう。

加えて、オランダ通詞なども、早い段階から薩摩藩では抱き込んでいた節があります。ペリーの来航時についても島津斉彬は迅速に情報収集を行っています。表向きは老中の阿部正弘からの情報提供を受けるといった形をとっていますが、それ以前に長崎経由でペリー来航に関する情報を入手しています。薩摩藩はオランダ通詞に報酬を支払い、代わりに情報を入手していました。

青山学院大学の片桐一男先生によると、オランダ通詞たちは出来上がった風説書を翻刻・密封して江戸に送ります。過程で記されたメモに関しても一切が焼却されます。しかしながら、

オランダ通詞たちの頭の中に入った情報までは消去することができないのですね。ですから、オランダ通詞は覚えていた情報を薩摩藩の役人たちに伝達します。そのようにして兼ねてから密接な関係を持っておりましたので、長崎の地役人たちは幕末における薩摩藩による情報収集に寄与していたのではないかと思います。

吉岡

蔵屋敷などを介したネットワークについてですが、佐賀藩は、これまた他藩とは違う特徴を持っていて、なかには江藤新平や大隈重信らが脱藩・上京して、他藩と交流する者や、反対に他藩から学者が佐賀にやってくるなどといったこともありませうけれども、基本的に佐賀藩は他藩の人材とは積極的に交流しないというスタンスを堅持しています。

そのため、他藩と比較すれば、それほど積極的に佐賀藩士が他藩士と交流を持って、情報交換をするような機会は多くなかったのではないかと考えます。

例えば、慶応年間に土佐藩の佐々木高行と大隈及び副島種臣が面会した時なども、佐々木としては両人の才能は認めるけれども、佐賀藩は幕府寄りであるから、腹を割って話をすることはできないと記していますし、なかなか他藩との間での交流は難しいところがあったのではないかと考えます。

ただし、佐賀藩は長崎警備をやっていましたので、長崎奉行所からの情報に関しては他藩より確実に多く、しかも、機密に触れるようなものも直接手に入れることができたという特徴を持っていました。加えて先ほどお話しもありましたけれども、地役人の館入によって得られる情報というものも大きいことか

ら、佐賀藩の特徴といえ、諸藩との横のつながりというよりも、長崎奉行所との関係に基づいた縦のつながりによって、情報を得ていたという部分が、史料を見ている限りでは大きかったと思います。

木村 ありがとうございます。長崎で九州各地の諸藩は、自らが構築してきた様々な人間関係にアクセスして、必要に応じて情報を取ってゆくというようなことでありまして、藩ごとに情報収集の目的こそ異なるものの、それら諸藩の動きが幕末期から明治期にかけて機能しているということは、間違いのないことなのだろうと思います。

視点を変えてみると、オランダなどはオランダ通詞と常に接している関係上、もともとオランダ通詞を経由して、オランダ商館に対し情報が提供されています。幕末頃になってくるとオランダの外交官たちは、今までのオランダ通詞を経由した既存の関係に基づいて情報収集を行っているのでしょうか。それとも、新たな形での情報収集を図っているのでしょうか。

私たちはどうしても日本史の視点から物事を見てしまいますので、オランダから日本国内にもたらされる情報の流れなどは、確認することができるのですが、日本からオランダにもたらされる情報の流れについては分かっていないことも多くあります。逆もまた然りとは思いますが、そのあたりを横山先生に教えていただきたいと思っています。

横山 一概に近世期を通じて論じることが難しい部分もあります。私が研究の対象としております、一八六〇年から一八六三

年頃までを例にしてみると、基本的にオランダの情報源としては、オランダ通詞に頼りっぱなしの状況になります。

オランダによる情報収集の手段としては、例えば、特別に神奈川奉行所の支配組頭との間に特別なコネクションを作って、そこから情報を得ようといった積極的な取組みはあまりせず、神奈川奉行所や各商會に勤めている日本人の話しを間接的に聞いて、日本の情報を判断しようとする程度の仕組みになっていると思います。

政局が一層緊迫してきた時期のことは、未だ詰め切れていない部分もありますが、その後も、オランダが得ていた情報の質にはゆれがあつたということになります。その理由としては幕末期に至って、長崎から江戸もしくは京都へと政局の中心舞台が移行したということが挙げられると思います。そこが長崎に主要な拠点を置いていたオランダの弱点といえ、弱点になるかと思えます。

木村 ここで、話が一段落したところもあるかと思えます。パネリストの先生方同士で質疑応答をいただいた後、まとめに移ってまいりたいと思います。何か本日の研究発表等で聞いてみたいことがありましたら、どなたからでも結構でございますが、いかがでしょうか。

横山 長州藩は薩摩藩と同様に、外国に留学生を派遣していますが、その時に関わったグラバーなどの外商との関係形成について、長州藩がどのように行っていたのかを教えてくださいと思います。

田中 長崎にいる外商と長州藩との関係についてなのですけれども、安政年間頃においては長州藩士が長崎に海軍伝習生の扱い

でやってきておりますので、そのような意味では関係形成の土地は存在していたと思います。彼らは長崎在住の砲術掛から学んでいるというところもありますので、外商との直接での関係であるのか、彼ら長崎在住の人間を通じた関係であるのかは、何とも言えないところもありますが、そういった海軍伝習生たちのつながりというものは大きな部分があったと思います。

その後、長州藩が武器を購入してゆく段階に入ってゆくと、組織として長州藩の存在が顕在化されるようになると思います。が、いずれにせよ取り掛かりの一つとして、安政期における長州藩士の海軍伝習生としての来崎は位置付けられると思います。

松尾 薩摩藩について、もう少し補足させていただきたいのですけれども、大河ドラマにも関わっているのですが、第一回目の放送で「Cangoxina」という言葉が出てまいりました。一六世紀

の地図がなぜ一六世紀に使われたかと言いますと、一六世紀のポルトガルとの交易の窓口は南九州でありました。一六世紀なのですけれども「鎖国」体制のもと、幕府の指示に従うオランダの船は薩摩藩領の沖を素通りして、長崎に行くのですが、一方、イギリス、フランス、アメリカなどの国は、幕府の指示など何とも思っていないので、素通りせず薩摩藩領の港に寄港してしまふ。そのため、他の地域よりも早く薩摩藩は激しい外圧にさらされて、大変な状況に追い込まれ、近代化・工業化に着手したのです。

薩摩藩は琉球を経由して、中国とのパイプを保有しています。

しかし、これは古い朝貢貿易と呼ばれる体制で、自由にいろいろな物が購入できたり、ヨーロッパの物を手に入れたりすることは不可能なのです。近代化・工業化を図るときに薩摩藩が頼りにしたのが、長崎でありました。

薩摩藩の近代化の第一歩は洋式砲術を採用することにあつたのですけれども、藩内には詳しい人は誰もいません。そこで、長崎の高島秋帆のところへ鳥居平七、平八兄弟を派遣して、様式砲術を学ばせた上で近代化・工業化に着手するという流れになります。

それから、同じく長崎で貿易品の取り扱いをやっている佐賀藩主の鍋島閑叟と島津斉彬は、どちらも母親が鳥取藩の池田家の出身であつたことから、非常に親しい関係を有していました。ゆえに、同じ外交問題に悩む佐賀藩を通じて、薩摩藩は佐賀藩から様々な情報を収集してゆくことになりました。

尚古集成館は世界遺産にも登録されておりますが、世界遺産の登録には外国の人たちが熱心でありました。彼らが興味をもつた理由が、なぜ日本がヨーロッパばかりのG7に名を連ねているのか、なぜ日本だけが一六世紀に植民地化を免れ、近代化に成功して、先進国の仲間入りを果たすことができたのかということ、「明治日本の産業革命遺産」の世界遺産登録への動きが始まったわけなのです。

二〇〇二年、イギリスでの産業革命資産の世界遺産登録に関わられたスミスさんという人が、尚古集成館に来館されて、鹿児島も日本の近代化に重要な役割を果たしたということ、鹿児島県における近代化遺産について説明してほしいと言われたことがあります。

そこで、スミスさんを案内して、反射炉を用いて鉄製の大砲を製造するところから、近代化が本格的に始まった。そして、オランダの洋書を参考に作りましたと説明すると「君の話は嘘だ」と言われました。「君は鉄を溶かしたことがあるか、技術は文章化できない。いくら本を読んでも鉄は溶けない」と返されました。

スミスさんたち外国人が思い描いていたのは、他のアジア及びアフリカ諸国が採った、必要なものをヨーロッパから輸入し、ヨーロッパ人の専門家から指導を仰いで近代化を図ったという方法でありました。ですから、日本も同じような方法を採用していたと考えていたわけです。

ところが「鎖国」体制が敷かれていた当時、薩摩藩ではそのようなことができません。そのため、オランダの洋書を参考しながら鉄を溶かしたとお話ししたところ「そんなことはできるはずがない」と言われたのです。

実は私、以前、鉄を溶かした経験があったのです。そのような経験もあって、スミスさんに「おっしゃることはわかる」と答え、薩摩藩が鉄製の鉄砲を作ることが可能であった理由は、オランダの洋書はあくまでヒントにしているわけであって、製造する過程の技術は日本のものに置き換えていると説明しました。

例えば、反射炉は一、五〇〇度近い温度に耐えられる耐火レンガを何万個と積み重ねて作られるのですけれども、そのレンガは薩摩焼の技術で作られているのです。同じ焼物であるから何とかしなさいということで、陶工たちに藩主から命令が下りました。機械はからくり職人が図面を紐解いて作っているとい

う状況でした。反射炉を造成する過程の技術は日本のものが転用されている部分があるということのスミスさんに説明すると納得され「おもしろい、世界遺産にすべきだ」と言われました。

ただ、それでも技術面での限界はあるのですね。どうしても最先端の知識が必要となったときに、薩摩藩が頼りにした場所が長崎でありました。長崎に海軍伝習所が設置されると、薩摩藩はいち早く伝習生を長崎に送り込みます。そして、様々な伝手をたどって、カッテンディーケをはじめとするオランダ人の教官たちに、訓練航海で鹿児島に来てくれと依頼して、実際に鹿児島に来てもらい、現地で指導や助言を受けたことが、鹿児島の近代化の第一歩ということになります。

それから、安政期の修好通商条約締結後は、外国から物を購入することができるようになるのですけれども、残念ながら薩摩藩領は、ヨーロッパとの開港場にはなりません。ですから、薩摩藩が頼りとするのが長崎でありました。薩摩藩は長崎を通じていろいろな物を買うことになりました。

尚古集成館は、建物こそ自力で建てることのできたのですけれども、中の機械はどうすることもできないものですから、長崎にいるオランダ人たちに接触して、長崎製鉄所にある機械と同じものを売ってもらうということになります。そのため、尚古集成館には長崎製鉄所と同じメーカーで、オランダにあったNSBM社製の機械も置かれています。このように、近代化すると長崎が占めるウェイトが大きくなっていったのではないかと捉えています。

木村 近代化という点では、佐賀藩なども似たような側面があると

は思いますけれども、そういったところは割と最初からオランダ頼りのような部分も多いのかなと思うのですが、いかがでしょうか。

吉岡 そうですね。佐賀藩は他の藩とは異なり、幕府からも特別扱
いされていた部分もありましたので、出島の出入りを許され、
オランダ人から様々な技術を教わるなどしていました。そのため、幕末期のうち、前半におけるオランダの役割は重要です。
ただし、後半になってゆくと、イギリスにシフトしてゆくとい
うような流れだと思えます。

木村 時間も押し迫ってまいりましたので、そろそろコメントも受
けながらまとめたいと思います。今回の企画では、長
崎がどういう役割を果たしたのかという問題について、先生方
からいろいろな角度に立ってお話しをいただいています。
その中で、本日明らかになったことといえば、専売制の問題
であったり、諸藩が持っている長崎のコネクションの問題で
あったり、コネクションを前提とした技術導入の問題でありま
した。それらが幕末よりも前から出来上がっていたシステムと
いうものがあるって、それが幕末になると、政治状況がかなり変
わるにもかかわらず、諸藩はそのシステムを活用して、その中
でそれぞれの藩がそれぞれのあり方を模索してゆきました。そ
の結集として、新しい政府が出来上がってゆくのだという姿が
見えてきたのではないかと思います。

本日、基調講演をいただきました藤田先生に、そういつ
た一九世紀の長崎をどのように見るのかという、点についてコ

メントを頂戴したいと思えます。

江戸幕府からしてみると、一八世紀の終わり頃から長崎をコ
ントロールするということが難しい政治課題であったように思
いますけれども、これが一九世紀を通じても長崎のコントロー
ルが難しかったといえますか、うまく成功していなかったとい
う理解でよいのでしょうか。やはり幕府は長崎を掌握できてい
ないところが多すぎたのでしょうか。それともある程度は幕府
も長崎のことは掌握していて、それなりに幕府にとって長崎は
幕政に寄与する存在であったと見做していたのでしょうか。

藤田 すでに一八世紀末には、長崎が幕府にとってまるでオランダ
との貿易をやめたのかと思えるぐらい、貿易利潤を生み出せな
い都市となっていたことは、間違いない事実だと思います。

ただし、長崎を通さないと情報が入ってきません。特にロシ
アとの関係においては、緊張が高まってきても他所からは何も
情報は入ってきておりませんので、幕府にとって、長崎は重要
だという認識はあったのではないかと考えます。

ましてや、天保期に入
るとアヘン戦争が起こり
ます。アヘン戦争の情報
を手に入れることは、幕
府にとって死活問題でも
ありました。そうなる
情報源としての長崎の役
割というものが、さらに
大きくなっていったと思



藤田 覚 先生
(東京大学名誉教授)

うのですが、経済的な意味での長崎の役割というものは、幕府にとつてほとんど存在しないに近いものがあると思います。

本日の話で出てまいりました、専売制の問題については、そのなかのどうなと思う部分はあるのですが、専売制自体は、一八世紀半ば以降、諸藩の中期藩政改革の一環として、多くの藩が採用するわけです。彼らをはじめ、諸家国産という名目で、江戸なり大坂なり専売品を運んで行って利益を得てゆきます。対する幕府はそれを流通の攪乱などといって制限しようとするのですけれども、結局はそれがまかり通ってゆくという歴史があります。そのような意味では前提が存在するのですね。

そして開港後には諸外国との貿易が始まるので、諸藩は幕府に対して貿易に参入させるよう、強い要望が出てきました。最初、幕府は駄目だということで、制限的であったものの、次第に押されてゆくという、いわゆる諸藩からの貿易参入要求があったという歴史もまた、踏まえたほうがよかったです。と思います。

あと、薩長土肥という枠組みを強調することについても、果たしてそれでよかったのかなと思う部分がありました。幕末の開港場として、その土地で自由貿易が行われてゆくということが地域社会に与える影響、地域社会といいますが、長崎の町に限らず、九州一帯のことを指しますが、地域社会でどういう変化が表れたのかという視点を持つことは、絶対に必要であると思います。

私の住んでいるところは、東京の多摩地域というところなのですが、ここでも幕末の開港で受けた巨大な変化というものがあるわけですね。こういうことを抜きにして幕末開港の話をし

てもあまり面白みがないのではと感じます。

幕末の開港によって、地域社会には深刻な影響、これは産業や流通の面で地域社会を作り変えてしまっているのではないかと思えるくらいのものであります。長崎は軍需品の目的が多いというところはあるのですけれども、地域社会への影響という点も幕末維新一五〇年を考える上で、考慮していただいた方がよいのではないかと思います。このようなコメントでよろしいでしょうか。

木村

ありがとうございます。大変耳の痛い、しかしながら課題としてはおっしゃるとおりのご指摘であったかと思えます。

私たちは九州という場所柄大きな藩が多い地域を研究対象としていきますので、それが主語になるような研究になりがちではあります。

文書史料の残り方としても特異な傾向がありまして、長崎は地方や町人の文書がやや他の地域と比較して少ないというか、よく掌握されていない現状があります。まだ残っているものもあるのではないかと思われるのですが、いかんせん諸藩の記録が研究上で占めるウェイトが大きいので、その中から長崎のことを考えてゆくという研究手法になつてしまう部分があります。

そうなると諸藩と長崎という関係になりますので、私からパネリストの皆様に対して、どうしても諸藩が主体となるイメージが強い物流であるとか、蔵屋敷を前提とした人的関係に関する質問をいくつか差し上げた次第です。

ところが、本日、藤田先生からの基調講演及びコメントでもお話しがありましたとおり、別に薩長土肥だけが頑張つて倒幕

したわけでもなく、いろいろな局面で様々な矛盾が噴出した結果として、最終的には時代が明治へと変化してゆくということになります。

その局面において、地域社会に住む庶民たちが普段の生活の中でどのように変化を感じて、新しい社会に移っていったのかという問題は、大きな課題として残っていると思いますし、今後の長崎研究がどうあるべきなのかということも考えなくてはならないと思いますながらコメントを伺いました。

お時間も残り一〇分程度となりましたので、コメントを踏まえた上で、パネリスト皆様のご研究の立場から長崎研究に対して期待されることなどありましたら、今後の研究の励みにもなりますので、一言ずつ頂戴できればと思います。

吉岡

本日は佐賀藩の立場からの参加であったのですが、私の本来の研究テーマ（幕末開国と開港場長崎の研究）から考えると、藤田先生からご指摘があった地域社会の変容という意味では、開港してから、貿易に限らず、開港場で働く労働力など、非常に多くの人たちが長崎に流入してくるという状況がありました。

もちろんそれらの労働力は、いろいろなところからやってきますけれども、近世以来の関係で言うと、島原や天草などから来た人々が多く存在するようです。居留地を造ったのも天草の人たちでありますし、そのような事実は何となく分かってはいるのですが、具体的にどのようなルートで、どのような人たちが、どういう風に長崎に入ってきたのかという細かい点については、未だ把握されていないところがあります。

実際のところ、地方の史料の存在が確認できないと研究が難

しい部分ではありますが、そのような課題を意識しながら、地域社会の変容というものを考えてゆく必要があると考えています。

織田

長崎研究への期待ということで、私は長崎に住んでいるのですが、長崎の幕末維新を考える上で場所としての長崎が重要であるというステージ論を唱えられる人が多い印象を受けます。例えば、長崎には医学校や伝習所が置かれ、そこで学びの場を提供したということなどが、よく言われるのですけれども、ただ単に場所を提供したというだけで終わっていいのかとも思います。もちろん、それは意義があることなのですからけれども、長崎の幕末維新はするように語られるだけのものなのであるうかと感じていきます。

今回の研究報告である「安政の開港とオランダ通詞」という題目で調査をしてみた時に、安政の開港時には、基本的に長崎の貿易システムが機能していないわけですね。吉岡先生の論文や先ほどの藤田先生のお話しにもありましたけれども、貿易の形態自体がそれまでとは違ってきています。例えば、目利が機能していないという状態が発覚します。そうすると、既存の貿易システムを根本的に変えて対処してゆく必要が生じ、居留地の経営にしても、今までやっていなかったことをやってゆかなければならなくなります。

そのような状況の中で、長崎が唯一、他の地域に影響を与えたのが、通詞（通事）のシステムだけであろうというように思います。長崎のオランダ通詞及び唐通事たちが、先んじて英語を学び、習得していたことが、開港時に貿易にとっても外交に

とつても、大きな貢献を果たしたと言えるかと思ひます。

さらに先んじて、軍事改革の面で言うと、高島秋帆による西洋砲術の創始ということがあります。医学においても卓越した役割がありますけれども、幕末維新において、長崎が一番大きな影響力を与えたものは、やはり言葉、英語をはじめとする外国語であつたのだらうと感じています。

やはり長崎の幕末維新はステージ論だけで語られるべき問題ではなく、人材を輩出するとともに開港場を通じて、日本全体に影響を及ぼしたと評価することができまして、少なくとも長崎は、場所としての役割だけではなく、人や技術の面にも重心を置いて研究されてゆくべきであらうと思つております。その点を今後、史料上から裏付けることができると、幕末維新史研究の新たな可能性が見えてくるのではないかと考えたところで

田中

長州の立場からお話ししますと、下関にはオランダ商館長の江戸参府の時には必ず立寄る場所でもありますし、朝鮮半島からの漂流民が、日本海側の海岸にやってきたりもするわけですが、それでも、それを必ず長崎まで送り届けるといった関係もありまして、長崎とはいろいろな意味で深いかかわりがあるのかなと思つています。

本日、研究報告をさせていただいた交易に関する話の中で、長州藩サイドの史料にはいろいろとお茶や俵物などの品目が出てくるのですけれども、実際、長崎の商人、長崎で活躍する薩摩藩の商人、土佐商会など、長崎で活動している商人たちの史料、当然制約はあると思ひますが、そのようなものが見えてく

ると、彼らが何を求めているのか、そして長州藩がどのような形で、長崎からの求めに応じてアクションを起こしていたのかということが分かつて研究上の視点が広がってくるのではないかと思つています。

松尾

現在、鹿児島島の歴史認識が大きく変わってきています。大河ドラマの時代考証に携わった際に担当の方がお見えになられて言われるには、西郷隆盛は以前「翔ぶが如く」で扱った経験があることから、同じような視点では描くことができないとのことでした。そこで、最新の調査研究の成果や関連する題材の情報提供に協力してほしいとの申し出がありました。

「翔ぶが如く」では「徳川幕府を倒す」という目的から、薩摩藩と長州藩が共に幕府と戦つて、関ヶ原以来の恨みを晴らしたような展開で描かれていました。しかしながら、今はそれは違つて、日本が植民地化されないために薩長と幕府双方がいろいろな活動を行うのですが、最終的に戦わなければならなくなつただけで、お互いが憎みあつて戦つたわけではないということも明らかになってきておりますので、そういった点も、時代考証に反映することができたのではと考えています。

ここ数十年の間で、活字化された史料集の刊行数もかなり増えてきましたし、インターネットなどで外国の史料も見ることが可能になり、様々な視点から物事を考えることができるようになってきます。従来言われていたような通説とは違つた議論の展開もできるようになってきています。

そういった中で薩摩と長崎は非常に恵まれている土地なのではないかと思ひます。例えば京都などは長い歴史の積み重ねが

あります。一方で京都は日本国内だけである程度の物語が完結する傾向にあります。対して外国との窓口であった薩摩や長崎は日本国内だけでは物語は完結せず、かえって日本国内だけで歴史を語ろうとすると誤解されることもあります。

特に薩摩などは日本の南隅にあつて保守的といった誤解を受けやすいのですが、一方で外交上の最前線の拠点となっていました。そういったところは看過されていたのですけれども、現在、それらの視点が注目されつつあります。

歴史文化というのは、他の所がいくらお金をかけても作れないものですね。持っているストーリーが鹿児島と長崎は非常に雄大ですので、それを上手く活用してゆくことが大事かなと思っています。

人と人、地域と地域との交流というものは、それぞれの地域が持つ歴史文化の衝突であると考えています。自分のことをちゃんと知っていないと、相手の文化に呑み込まれ流されてしまいます。今、鹿児島は流されている状況にあると思っています。江戸時代の人たちの方が、鹿児島の歴史文化を誇りに思っていたのではないかと思います。西郷や大久保は京都に行っても自分は薩摩藩出身者だという矜持のもと胸を張って身持ちを崩さず、相手のことをしっかりと受け止めて、自分の成長につなげています。

今の鹿児島の人の中には「鹿児島には何もない」とおっしゃる方もいます。ですから、東京や福岡に行くと、相手の文化に呑み込まれて流されてしまっている。

街づくりなどでも、鹿児島にしかないものを平気で壊してしまう傾向があります。鹿児島にも石橋があるのですけれども「い

らない」といつて撤去してしまおうとするわけです。反対運動があつて何とか破壊は免れたのですけれども、鹿児島の価値を理解していない、文化財を保存しようとする気持ちが希薄なところもあります。

現在、明治維新一五〇年で鹿児島も含め、各地の歴史を振り返る、捉えなおすという動きが強まっておりますので、この機会に自分たちの歴史文化をもう一度見直して、将来の発展あるいは自分たちの成長につながってゆけばよいのではと考えています。

横山

私が幕末維新期の研究を専攻していて、どのように判断してよいか、頭が痛いなど思っているところがあります。それは何かというところ、戊辰戦争の勃発によって、新政府側が権力を奪取するわけですが、それには多くの人や物を動かさなければならぬという動きがあります。その過程で、武器を外国から購入するという動きがあります。それ抜きでは戊辰戦争は遂行しえなかつたわけでありまして。

一方で、先ほどの研究報告での沢宣嘉に関する話にもありましたとおり、変革にともなうエネルギーの中から、原理主義といえますか、外国に対する排外的な動きが起こることがあるわけですね。

私自身、相反する二つの動きをどのように考えたらいいかを整理できないまま、この場に臨んでいる部分もあるわけですが、外国からの武器購入を権力奪取のための方便といってしまうと、それまでではあるものの、実際のところは、藤田先生のお話しにもあつたような民族的危機という状況のもと、結果とし

て、外国の力に依存するという解決策を新政府側が採っていたのではないかと考えます。

こうした慶応三年から明治元年頃にかけての権力の移行期の問題について、これから長崎を通じてきちんと考えてゆくということが重要であるということを、パネリストの皆様の意見を伺いながら感じた次第です。

木村 ありがとうございます。今回の「長崎の幕末維新一五〇周年記念シンポジウム」の趣旨に戻りますと、長崎がどのような役割を果たしたのか、まだまだ考えるべきところがありますし、そのことは実は日本と世界がどのように関わってくるかという問題に関わってくるところがあると思います。長崎は非常に魅力あふれる場所だということを、ここで確認ができたのではないかと思います。それでは時間となりましたので、パネルディスカッションを終了したいと思います。

(終了)



パネルディスカッションの様子